

共和党ロムニー候補の副大統領候補選びが示す選挙の流れ

渡部 恒雄

東京財団
ディレクター（政策研究）
上席研究員



1. なぜ副大統領選びが重要なのか？

4月10日、共和党の大統領予備選で2番手につけていたリック・サンタラム元上院議員が撤退を表明したため、共和党の大統領候補は事実上ミット・ロムニー元マサチューセッツ州知事で確定した。そうなると次の焦点は副大統領候補選びである。副大統領候補は、英語ではランニング・メートともいわれ、文字通り今後の大統領選挙をロムニー候補と二人三脚で走っていくパートナーである。しかも、予備選挙という有権者の関心を集めるイベントが終わった後、夏の共和党大会と9月からの本格的な論戦の前に、メディアの関心が薄れる中だるみを防ぐためにも、重要な選挙キャンペーンのひとつでもある。

副大統領選びというのは、大統領選挙の行方を大きく左右する戦略的岐路でもある。副大統領候補のキャラクターが選挙の行方と勝敗を決めることもある。また、当選した後の政権の方向性を、副大統領が決めることもある。

この点で、過去2回の共和党の副大統領候補選びが、ロムニー陣営に重要な教訓を与えている。前回の2008年の大統領選挙では、中道派とみなされ保守派の支持が弱かったジョン・マケイン候補は、ランニング・メートに保守派の支持が大きいサラ・ペイリン元アラスカ州知事を選んだ。これは保守派へのアピールとともに、当時40代前半というペイリンの若さが、70歳を超える高齢のマケイン候補の弱点をカバーして、かつ女性有権者からの支持も期待したものだ。結果をみれば、ペイリン候補の外交での経験不足と、「私はアラスカに住んでいるので、ロシアを監視することができる」といった迷言の連発で、結局のところマケイン陣営の足を引っ張った。

その前、2000年のブッシュ（子）候補の時は、テキサス州知事上がりで、国政の経験がないブッシュの外交やワシントンでの官僚操作術を補完するために、これまで大統領首席補佐官や国防長官を歴任したワシントンインサイダーのチェイニーを選んだ。チェイニーは選挙運動に華を添えることはなかったが、副大統領候補同士のディベートでは、経験に裏打ちされた大人の議論で、ブッシュの経験不足を懸念する有権者に安心感を与えた。問題は、チェイニーの保守的な影響力とその秘密主義が、イラク開戦理由への疑惑を呼び、ブッシュ政権への大きなダメージとなったことだ。

2. ロムニー候補の副大統領候補を選ぶ5つのポイント

ロムニー候補のランニング・メート選びはどうなるのか？ 以下の5つのポイントが考慮されるだろう。

第1に、抜群の知名度と豊富な資金力にもかかわらずロムニーがここまで苦戦してきた最大の理由は、共和党保守派からの支持が得られなかったことだ。この点では、保守派の草の根運動であるティーパーティー（茶会運動）の支持を集めるような保守派の選択が考えられる。

第2に、ロムニーの弱点は、エリート臭い金持ちだとみられて、ブルーカラーから好かれていないという点である。これを克服するには、庶民にアピールするような人物が求められている。

第3には、人種の要素である。黒人のオバマ候補に対抗する白人のロムニー候補にとって、女性を含むマイノリティー（少数派）の選択は支持を広げるための重要なツールだ。特に、近年、人口が大幅に増え続け、影響力を増して

いるヒスパニック系の支持は重要である。ヒスパニックが多いテキサス州知事を経験したブッシュ（子）候補は、スペイン語を駆使して、それなりの支持を得た。ところが、ロムニーは保守派の支持を得るために、メキシコからの移民を制限する厳しい政策を打ち出したため、ヒスパニックの支持を得られていない。副大統領にヒスパニック系を起用することはかなりの意味がある。

第4には、選挙戦略上、その州での勝利が全体の勝敗を決めるような重点州を地元に行っている候補もポイントが高い。たとえば、2000年のブッシュ対ゴアの接戦で裁判闘争になり、最終的な勝敗を決めることになったフロリダ州などは、今回も重要な州である。

第5には、副大統領となってから、大統領のじゃまにならずに良好な政権運営ができる人物が必要という点である。実はこれまで、副大統領というのは米国一の閑職で、「盲腸」とまでいわれていたが、近年その役割が増してきている。クリントン政権のゴア副大統領はインターネット政策や環境政策で重要な働きをし、ブッシュ政権のチェイニー大統領は「影の大統領」といわれるほど実質的に政権を切り盛りし、現在のバイデン副大統領も「2人目の國務長官」としてオバマ外交の一翼を担っている。

このようなさまざまな要素から現時点では多くの名前があがっている。最終的にどのような選択となるのかは予断を許さないが、それぞれの候補と上記の5つの選考ポイントを見ていくと、ロムニー陣営の抱える選挙戦略上の課題がよく理解できる。

上記の5つのポイントを最も多く兼ね備えた候補が、重要州のフロリダ州選出のマルコ・ルビオ上院議員だ。彼は2010年の中間選挙に39歳の若さで、ティーパーティーの支持を受けて当選した。キューバ移民の息子であるルビオは、ヒスパニック系の有権者にも、共和党保守派にもアピールする存在として、大いに注目されている。弱点はその若さと経験不足、キューバ移民の両親の経歴についての虚偽がばれて批判されたことなどがある。ルビオは両親はキューバのカストロ政権と闘ったといていたが、キューバ革命の時点ですでに両親が米国に移住していたことがメディアに暴露されたのである。

4月13日から15日にかけて行われたCNN世論調査が、副大統領候補の中で最も好ましい人物を人気順にリストアップした。ルビオは4位に入っている。その他は以下のような候補がいる。1位：コンドリーサ・ライス前國務長官。2位：リック・サントラム元上院議員。3位：クリス・クリスティー、ニュージャージー州知事。4位：マルコ・ルビオ上院議員。5位：ポール・ライアン下院議員。6位：ボビー・ジンダル、ルイジアナ州知事。7位：ボブ・マクドネル、バージニア州知事。8位：ロブ・ポートマン前下院議員。

これらの候補はそれぞれに一長一短がある。1位のライスは、ブッシュ政権の國務長官としての圧倒的な知名度と黒人女性というマイノリティーの魅力がある。しかし、ブッシュ政権で拡大した財政赤字やイラク戦争の難航など、負の遺産も背負いこむことになる。2位のサントラムは、共和党の保守派、特に中西部での支持を集めて、これまでの予備選で次点の位置を保ってきた。共和党をまとめるという意味では利点があるが、あまりカリスマ性のない白人男性2人のコンビは、一般有権者へのアピールが弱くなる。

3位のクリスティーはカリスマ的人物としての魅力は、逆に大統領候補のロムニーがかすんでしまうという懸念がある。5位のライアンは42歳の若さにして下院予算委員長という実力と政策は財政保守派からの支持は得られやすいが、経済成長という点では、むしろ現職のオバマ大統領とともに批判される立場にもある。6位のジンダルは、インド系の40歳で保守派としてのフレッシュな魅力があるが、2009年のオバマ大統領の一般教書演説への反論スピーチが、きわめてさえないという弱点がある。

7位のマクドネルは、勝敗の鍵を握る州のひとつ、バージニア州の知事であり、行政手腕に優れ、雄弁だが目立った特徴がないのが弱点。8位のポートマンも、通商代表やホワイトハウスの行政予算管理局長を歴任した行政の実力派で、勝敗の鍵を握るオハイオ州を地元とするが、一般有権者へのアピールは弱い。

世論調査の順番では下位だが、マクドネルやポートマンのような実務派への評価は、専門家の間では高く、彼らを選ばれる可能性も低くはない。その理由のひとつは、秋の大統領選は接戦が予想されるために、副大統領候補には、大統領の足を引っ張らないような堅実な候補がいいのではないか、という考え方が広がっているからだ。これは2008年のペイリン候補の失敗の教訓である。いずれにせよ、ロムニー陣営はさまざまな観点から慎重に副大統領候補を選ぼうとするだろうから、しばらくは副大統領候補の選定が米大統領選の焦点となろう。

※筆者略歴：1963年衆議院議員（現民主党最高顧問）渡部恒三の長男として福島県に生まれる。東北大学歯学部を卒業後、米国New School for Social Researchで政治学修士課程修了。95年米国の有力シンクタンク、戦略国際問題研究所（CSIS）に入所。客員研究員、研究員、主任研究員を経て、2003年3月から上級研究員。日本の政党政治と外交政策、アジアの安全保障、日米関係についての分析・研究に携わる。2005年帰国。三井物産戦略研究所を経て、現在に至る。主な著書に、『米軍再編と日米安全保障協力』（共著、福村出版）、『「今のアメリカ」がわかる本』（三笠書房）、『「同時多発テロ」の日本への挑戦—ワシントン戦略シンクタンクからの警告』（財界21）など。

